

## 平成13年度千葉県豚共進会開催さる —よりよい豚肉生産にかかる優良種豚を求めて—

千葉県農業大学校 矢 挽 輝 武

### <会場とその周辺>

標記の共進会が平成13年10月25、26日（木、金）の2日間、八街市のJA全農ちば・八街家畜市場で開催された。このような共進会の見学は筆者にとって初めてであった。会場の八街家畜市場の門からおおよそ100mほど行くと車の消毒槽があった。その消毒槽の奥は広い空き地になっており、そこに第1と第2の2つの審査場が設けられていた。その奥に、事務所をはさんで2棟の建物があり、出品豚を係留する係留場が設けられていた。その施設はかなりの頭数の豚を係留できる広さで、なお、入り口から会場への通路および市場の周りは木や森に囲まれ、環境上よい立地条件のように思われた。

### <審査の様子と出品者の資格、審査条件>

筆者が会場に着いたのは午前10時を少し過ぎ、すでに豚の審査が始まっており、畜産関係者や見学者が2つの審査場を取り囲んでいた。審査委員は樋口勝治委員長（県畜産総合研究センター生産技術部長、現在：千葉県農林水産部畜産課課長）以下、7人の委員の方によって審査が行われているところであった（写真1）。

出品者の資格は、(社)千葉県養豚協会の会員であること。出品豚の条件は、(社)日本種豚登録協会の種豚登録豚または子豚登記豚で、品種はランドレース、大ヨークシャー、ハンプシャー、デュ

ロック、パークシャー種および一代雑種雌豚血統証明豚であることの他、各地域の群市共進会を経て選抜されたものということである。

区分はⅠ部が第1類（未經産）・第2類（経産豚）・第3類（若齡雄豚）・第4類（壯齡雄豚）、Ⅱ部（親子群）、Ⅲ部（能力検定豚）、Ⅳ部（F<sub>1</sub>繁殖豚）である。

### <審査基準>

審査基準は、(社)日本種豚登録協会の基準による。

### <出品豚および審査結果>

各区分の出品頭数は未經産豚：9頭、経産豚：4頭、若齡雄豚：14頭、壯齡雄豚：7頭、親子群：1組、F<sub>1</sub>繁殖豚：4組、計45頭で、出品種豚場は28の指定種豚場（平成13年度）のうち15農場（53.6%）であった。



写真1 出品豚の審査風景

審査の結果は次の通りである。

優等賞として、

- I部第1類：アベリン ベリンダ サクセス ナルケ3-4 (L)  
佐原市 成毛芳郎 (写真2)
- 2類：フラッシー テックス サプライズ アツタ1-1 (D)  
佐倉市 熱田好司 (写真3)
- 3類：テックス ブラボー リアルタイム アツタ3-2 (D)  
佐倉市 熱田好司 (写真4)  
サクセス ベリンダ アベリン ナルケ3-1 (L)  
佐原市 成毛芳郎 (写真5)

名誉賞として、

- I部第4類：リアルタイム ロイヤル ブラボー アツタ2-1 (D)  
佐倉市 熱田好司 (写真6)



写真4 優等賞を受賞した  
テックス ブラボー リアルタイム アツタ 3-2 (D)



写真2 優等賞を受賞した  
アベリン ベリンダ サクセス ナルケ 3-4 (L)



写真5 優等賞を受賞した  
サクセス ベリンダ アベリン ナルケ 3-1 (L)



写真3 優等賞を受賞した  
フラッシー テックス サプライズ アツタ 1-1 (D)



写真6 名誉賞を受賞した  
リアルタイム ロイヤル ブラボー アツタ 2-1 (D)

などが選ばれた。

筆者自身、なにぶんにも初めてなので、審査の仕方がわからなかったが、宮原常務理事（千葉県養豚協会）や内藤昌男室長（県畜産総合研究センター生産技術部生物工学研究室）から審査についての説明を受け、自分なりに審査を行ってみた。その結果と審査委員の先生方との結果がほぼ一致し、内心ホッとした。出品豚の審査が終了した後、審査の仕方・ポイントなどについての勉強会も催され、筆者自身、教えられるところ大であった。

#### <感想>

上記の出品頭数や出品種豚場数は最近減ってきていると聞き、養豚産業の発展を願う者にとって一抹の淋しさを禁じ得なかった。しかし、防疫衛生対策の観点から出品を見送った種豚場経営者も、以前に比較して多くなってきているのではなかろうか。例えば、県養豚協会の会員になっておられる(有)佐々木農場あるいは(株)シムコ館山農場などのSPF豚農場から豚は出品されていない、など。

感染症（感染症）の発生・流行には①病原体・感染源、②感受性動物（宿主）、③環境（感染経路）の3つの要因が相互に関係している。かかる共進会のようなイベントにおいては、衛生管理や疾病に対する清浄度が異なる養豚場から豚が一堂に集まることから、上記の感染症成立の3要因をすべて満たしている。しかし、その3要因のうち1つが欠けても感染は起こらない。このようなことから、豚の搬出入の車輛、係留場内での豚体の噴霧消毒、家畜市場内の清掃・消毒、ヒトの健康管理・衛生管理などは言うまでもない。また出品豚に対しては、例えば、有効なワクチンのあるも

のは事前にワクチン接種を、さらに、免疫学的な抵抗力を付与するために免疫賦活剤などの投与等をあらかじめ行って、抵抗力の増強を図ることも重要ではなかろうか。

なぜならば、筆者なりに、このような共進会のもつ意義は深いと思うからである。すなわち、よい豚肉の条件として①きめが細かく、②しまりがよく、③サシが入って、④軟らかく、⑤獣臭がなく、⑥甘味のある、などを充たした豚肉と言われている。このような豚肉生産を目標に、産肉性、繁殖性、強健性などの品質向上を目指した育種改良を競うことは、それだけ目標に近づくことではないかと考えるからである。豚の産肉性や肉質等については、遺伝による影響が非常に大きいことが判明している。したがって、産肉性に優れた肉質のよい「豚肉」を生産供給するためには、種豚の段階でこれらの形質を十分に改良しておくことが重要なことになる。

千葉県では、種豚共進会と同時に“肉豚共進会”も実施されている。そのねらいは、肉質のよい美味な豚肉を作るためのほかに、特に種豚改良の成果を常に検証するという意味で重要なものである。肉豚共進会において、特に上位に入賞した出品豚についてと殺・解体し、枝肉とする。この枝肉について、肉質（理化学検査も含む）や産肉性などととも、当該農場の衛生状態を知る意味で、呼吸器系も含めた各種臓器における病変（疾病）の有無・軽重、ならびに血液なども検査をする。さらに、抗生物質・抗菌性物質（合成抗菌剤も含む）の残留の有無、および試食による官能検査なども実施し、それらの総合点で、評価すべきではないかと考えられた。消費者が求める“安全、安心、美味な豚肉”生産のために……。

なお、参加された種豚場経営者の多くに後継者がいると聞き、千葉県養豚界の力強さが感じられた。このことは、参加された多くの方々も同じような思いを持たれたことでしょう。

終わりに、豚を出品された種豚場経営者の方々、および共進会の審査について種々ご教示を

賜った(社)千葉県養豚協会・宮原強専務理事、千葉県畜産総合研究センター生産技術部生物工学研究室・内藤昌男室長に深謝する。宮原強専務理事には、本稿を纏めるにあたり有益なご助言を賜ったことを付記し、重ねてお礼を申し上げる。

## ブタ・アラカルト



養豚界の発展を、と“願掛け”生産に励む

トン子とトン吉〔千葉県食肉公社（旭市鎌数）にて〕

写真提供：矢挽輝武氏